昭和63年度厚生省心身障害研究
「母子保健システムの充実・改善に関する研究」

乳幼児健診の縦断的検討

桜井　実*, 加藤充子*
神谷　斉**

要約：乳幼児健診に発達健診が取り入れられて約10年が経過した。健診によって得られたデータを縦断的に検討し、さらに就学前の発達状態と比較検討することによって、現行の発達健診の問題点を明らかすることを試みた。この結果、乳児健診はその後の健診との相関がなく、1才半、3才児健診、就学前の発達状態との間には有意の相関があることが解った。

見出し語：乳幼児健診、発達健診

対象及び方法：対象は、昭和56年4月2日から昭和58年4月1日の間に出生し、1才半健診時にK町に在住していた417名である。K町在住児に対する乳児健診は、K町を管轄するT保健所で満 4ヶ月及び満10ヶ月児を対象に行われており、保健婦によって個別に問診の聞き取り、健診項目の確認が行われ、さらに小児科医による診察が行われて結果判定がなされている。1才半健診はK町で乳児健診と同様に、3才児健診は保健所で児童相談所判定員をスタッフに加え行われている。健診方法及びの発達健診項目は表 1に示す如くであり、個人カルテに連続的に記録されている健診データを縦断的に検討した。これと同時に、昭和57年4月2日から昭和58年4月1日の間に生まれ、昭和63年10月現在K町内の4幼稚園及び3保育園の 5才児クラ

表1　健診方法及び内容

健診	4,10ヶ月	1才半	3才
実施主体	保健所	町	保健所
実施者	小児科医1 保健婦5-7 栄養士1 X線技師1 事務員1	小児科医1 歯科医師1 保健婦4 看護婦1 歯科衛生士2 栄養士1 事務員3	小児科医1 歯科医師1 保健婦8 栄養士1 検査技師1 心理判定員1 事務員3
発達健診健診項目	問診 自然肢位観察 姿勢反応 (Tr,Lan,Ax) 視聴覚反応 把握、模倣動作	問診 自然肢位観察 言語(絵指示、有意語) 操作(描画、積木、円板)	問診 集団遊び 言語(絵名称、色、大小比較) 操作(折り紙、積木、描画)

*三重大学小児科学教室(University of Mie)　**国立三重病院(National Hospital of Mie)

スに在籍した189名について、昭和63年10月-11月に「TK式.幼児用田中B式知能検査」及び幼稚園、保育園担任保母に対する聞き取り調査を行い、1才半以降に転入したため今回の健診調査の対象にならなかった40名を除く149名について、健診結果との相関を検討した。なお、本調査の対象となった189名は、K町の平成元年度就学児の87.5%にあたる。

結果：各健診の受診者数及び発達健診項目に不通過または異常項目があり経過観察となった児の数を表2に示す。

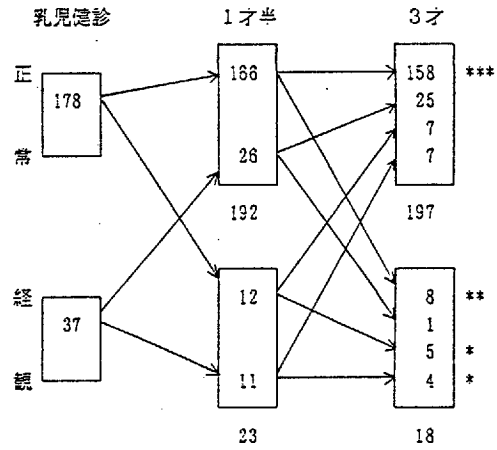
表2　受診数及び経過観察数

健　診	4ヶ月	10ヶ月	1才半	3　才
受診数	218	185	366	323
経観数	27	21	32	21
経観率	12%	11%	9%	7%

4カ月では、頸定不完全と姿勢反応の遅れ、姿勢反応にみられる伸展傾向など姿勢反応の異常のために経過観察となる児が多く、10カ月では運動発達（立位）の遅れ、1才半、3才は言葉の遅れによって経過観察となるものが多かった。全対象417名のうち、乳児期から3才までK町に在住し、乳児、1才半、3才児健診を総て受診した児は215名であり、表3はこれらの児の健診結果を縦断的に示したものである。健診結果がすべて正常であったものは158名(73.5%)、すべて要経過観察であったものは4名(1.9%)であり、他のものは健診間で結果に変動があった。各健診間で正常と経過観察になったものとの間の相関を検討した結果、乳児健診と1才半、3才児健診の間には相関がなく、1才半と3才児健診間には有意の相関があった。

また、K町内の4幼稚園および3保育園5才児を

表3　健診結果の流れ



対象に行った知能検査及び担任保母に対する聞き取り調査では、対象となった189名のうち発達に問題があると考えられたものは14名(7.4%)あり、IQ 75未満　7名、IQは75以上あるものの聞き取り調査で、集団適応、生活の自立等に問題があると考えられたもの7名であった。189名のうち、健診データのある149名について就学前の状態と各健診結果との関係を表4に示す。乳児健診との相関はなく、1才半及び3才児健診結果とは有意の相関があった。また、全健診を受診した69名のうち、就学前の調査で問題があった7名は、表3 *印の様に分布していた。

表4　就学前の発達状態と健診結果の関係

健　診			乳児健診		1才半		3　才	
			正常	経観	正常	経観	正常	経観
5才	正　常		64	12	106	6	107	3
	異常	IQ	2	1	3	2	3	1
		他	3	1	3	1	1	1

考案：乳児健診では発達健診の健診項目として、運動発達レベルの確認、姿勢反応、注追視、把握動作、対人反応等が取り入れられているが、今回の調査では運動発達の遅れ、姿勢反応異常で経過観察となる例が多かった。しかし、乳児健診と1才半、3才児健診、就学前の発達状態と

の相関はなく、発達障害児の早期発見という観点からは充分に目的を果たしているとは言い難い結果であった。今後の健診内容の検討、健診技術の向上に待つべきところも多いと考えられるが、乳児健診における発達スクリーニングの限界を理解した上で、健診の目的、内容、事後の指導について再検討を要すると考えられた。1才半健診、3才児健診、就学前の発達状態の間には有意の相関関係が認められた。しかし、我々の2年間の調査の経験から、保健所で実施され、児童相談所で事後の指導、経過観察が行われている現行の3才児健診では、健診後から就学までの継続したきめ細かい指導が難しく、経過観察も不十分になりがちで、次に市町村の単位で行われる就学指導に健診結果が生かされていないのが実状であった。

以上の結果を踏まえ、現行の乳幼児健診をさらに意味のあるものにするために、3才以降の小児保健サービス体制について検討する必要があると考えられた。4、5才児の多くは地域の幼稚園または保育園に通園しており、今回の調査でも、就学前年秋の時点で就学対象児の 87.5%が在籍していた。従って、3才以降の保健サービスについては幼稚園、保育園を単位とし、市町村及び児童相談所がタイアップした形で行われるのがよいと考えられた。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:乳幼児健診に発達健診が取り入れられて約10年が経過した。健診によって得られたデータを縦断的に検討し、さらに就学前の発達状態と比較検討することによって、現行の発達健診の問題点を明らかすることを試みた。この結果、乳児健診はその後の健診との相関がなく、1才半、3才児健診、就学前の発達状態との間には有意の相関があることが解った。